

不器男記念館瓦版

(2)

令和七年十一月発行

青木亮人先生と俳句の小径をゆく



令和七年十月二十五日に俳句の小径を巡る「青木亮人先生と俳句の小径をゆく」を開催しました。「汽車見えてやがて失せたる田打かな」↓正木本店↓「泳ぎ女の葛隠るまで羞らひぬ」↓正木正光酒造場の順に、愛媛大学青木亮人先生に解説いただきながら散策しました。解説では、水原秋桜子さんの「およぎつゝ人紫陽花にかくれけり」や片山由美子さんの「山葵擦るやがて男の歌低し」などの作品と比較しながら、「やがて」や「まで」といった言葉が、短い俳句でありながら、時間が流れるような感覚を表現できることを教えていただきました。

十八番目の句碑

松野町松丸周辺には、芝不器男の句碑が十七基あり、「俳句の小径」として親しまれています。各句碑には音声解説が聴ける二次元コードも設置されています。

その俳句の小径とは別に、十八番目の句碑が滑床溪谷にあります。「滝音の息づきのひまや蝉時雨」という作品です。芝不器男さんが東北帝大時代に訪れた日光の華厳の滝で詠んだものだと思われます。滝しぶきの音の強弱に、蝉時雨が響いている光景が詠まれています。言葉遣いにも特徴があります。「息づき」という、万葉時代の言葉を取り入れるその試みは当時の俳壇で注目を集めていました。



不器男塾の一句

棘からの解放掌に熟れ蜜柑	天弓
海風を受けて眩しいみかん山	一代
皮むけるしるがドロドロみかんの木	臣叶
青空に方言飛び交うみかん山	五鈴
遠くに投げて見えなくなった蜜柑かな	ぱんだ
足元に緑色の実みかん山	玄基
和歌山のみかんの皮がむけるまで	結星
黄金の海まで一気に蜜柑風	藍月
雲切れて蜜柑ぽかぽか色づきぬ	花式部
無農薬蜜柑のゆきわたり句会	ゆか

不器男記念館の予定

【不器男塾】

十二月二十日(土) 十四時～十六時
一月十七日(土) 十四時～十六時
【第七十二回不器男忌俳句大会】

二月二十二日(日) 会場 松野町役場